

宮本忠長とその事務所

——地方の建築文化を担って——

村松貞次郎

地方の時代、と言われてすでに久しい。建築の世界でも同様で、地方の建築家の在り方とか建築の地方性とはなど、ほぼ同じ含みのさまざまな言葉がとり交され、地方における建築関係の講演会でのテーマも、申し合わせたようにそれである。

その“地方”という言葉はいかにも無神経で嫌なものだとする人もある。私も何度講演を依頼されても“地方”の意味がどうもピッタリと来ない。言葉の辻褃を合わせてどうやら役目を果すのだが、この人も情報もほとんど均質で超高密度な日本の国土の中で、はたして中央と地方を区分する必要があるのか、できるのか、と自問自答して正直のところまだ納得できないでいる。

そんな時、私は宮本忠長さんを想う。千万の理屈を超えて、まぎれもなく、堂々と、しかも誠実に生きている“地方”の建築家がここには居る。それが宮本さんだと思いついたとき、地方・中央の自問自答を私は放棄して、胸を張って地方の建築家よ、こういう仕事ぶり、こういう建築を建ててくれと宮本さんをいつも引き合いに出すのである。私にとって宮本忠長という建築家はそうした人である。

宮本さんと知り合いになったきっかけは、たしか故佐藤武夫先生に引き合わせて頂いたことだったと記憶している。以来淡々とした交際を頂いてきたが、お会いするたびにそのきわめて篤実な人柄の印象を深めていた。しかもその素朴とも言える建築家の心の底に、清冽な信州の山河を映したロマンと情熱が宝石のようにきらめいているのも知った。今になって思う、“地方”とはその建築家を育てた山河の精髓であり魂魄であると。その精気を享けるか、あるいは不敏にして無感であったかによって地方の建築家の生死がわかる。

宮本さんとの距離が急に近づいたと感じたのは、長野市立博物館のコンペティションの審査が終了して結果の発表があった時点である。他の方がたと共に私も自信をもって選んだ案が宮本忠長さんのものだったことを知って、我が意を得たりとする思いだった。この作品は見事に竣工して昭和56年度の日本建築学会賞を授けられ、その受賞の祝賀会が長野市の有志の人びとによって開催された。私も招かれて出席したが、地元の政・財界の主だった人びとを始め、工事に関係した職人さんたちまで出席して驚くほど盛会であり、しかもまことに温く心のこもった集いであった。地方の一建築家の祝いの会が、こんなに多くの人びとの好意をもって催された例を私は他に知らない。宮本忠長はなんと幸せな建築家であろう、

それは今なお御健在の父君、宮本茂次さんから親子二代、営々と誠実に地方の建築家として献身してきた実績のじつにたしかな証しであると、私は祝盃をあげながら感じ入った。しかもそれが、政治や経済と癒着したものではなくて、文化としての建築を通じてのものであるだけに、信濃の大气のように清々しい。この爽やかさは宮本さんにも参会の方がたにも共通したものであるだけにその会は余計に素晴しかった。地方の建築、地方の建築文化の在り方をこれほど雄弁に語って自信を持たせてくれた集りは稀有のものであろう。

会場で、私はその市立博物館工事に参加した職人さんたちと愉快地話し合った。こういう会に職人が出席するのも珍しい。いかにも宮本さんの会らしくて喜しかったが、何故この工事に職人としてこれほど入れあげたのか、というぶしつけな私の問いに、宮本さんのところの図面の迫力、あれを見ると、こりゃあ難しいと先ず尻込みする。そして次に、ようしやってみようと思う。魔力みたいなものに引きこまれるのですね。という意味の返事が異口同音に返ってきた。宮本さん自身も、こちらがその気になって探し出せば、一つの郡に少くとも一人は素晴らしい棟梁、職人がいるものです。と話して下さったことがある。私は宮本建築の秘密を垣間見た思いがした。風土に人を加えてはじめて地方の建築文化が打ち立てられ守られる。宮本さんの“地方の建築”はかくて本物である。意識だけが独走し、自分だけで建築をつくっていると錯覚しがちな建築家は、天地の精と造る手の献身とを享けることはできない。

今年の初夏、私は信州須坂の古い町屋風のお宅で忠長さんの父君、宮本茂次さんのお話をゆっくりうかがう機会があった。若いころ逋信省管轄で山田守や山口文象に鍛えられ長野に帰った建築家。朴訥なまさに地の塩のような建築家である。この父にしてこの子ありか。その小布施の北斎館を中心とする町並みの再開発計画と新旧の建築も、心のこもった、しっかりとした佳作であると思った。

劉備玄德に従う関羽・張飛を私に連想させてくれる宮本事務所のチーフ諸君も素晴らしい存在である。彼らもまた信州の天地の精気を十分に吸収して、まさに地方の建築家のお手本のような人たちである。やがて緑岬舎に據つてさらに大きく飛躍するであろう宮本さんとその事務所の活躍は、ほんとうの意味での“地方の建築家”の将来を占うものとして注目されてよい。

(東京大学教授)